

国際交流事業における在日コリアンの参与
——対馬と下関の朝鮮通信使再現行列を中心に——

中 村 八 重*

Participation of Korean Residents in Japan in International Exchange Project:
Focusing on *Chosen Tsushinshi* Parade of Tsushima and Shimonoseki

NAKAMURA Yae*

Abstract

There is a movement to utilize *Chosen Tsushinshi* in local festivals in Korea and Japan respectively, therefore to utilize it in tourism and local promotion. The fact that the records related *Chosen Tsushinshi* (Joseon mission to Japan) were applied to and registered in the 'Memory of the World' in October 2017 jointly with Korea and Japan is not irrelevant.

In the background to actively use *Chosen Tsushinshi*, it is intended that *Chosen Tsushinshi* should be regarded as a symbol of friendship and peace between Korea and Japan. However, the emphasis on "peace" and "good diplomacy" in the Edo era can leave room to interpret the era of the Japanese Empire as heterogeneous.

In this article, it is examined that how the process of establishing the *Chosen Tsushinshi* parade can be related through the case of the Korean residents, which originated in the imperialist era, Korean Residents Union in Japan (Mindan). Also, it is wanted to clarify the problems of the international exchange project which forget the memories of colonial period and imperialism. Specifically, the cases of Tsushima and Shimonoseki are adopted among the local governments performing the reproduction process of *Chosen Tsushinshi* parades as part of the local festival.

Tsushima and Shimonoseki are representative areas that have shared a strong sense of solidarity with Korea even after the war, during the Edo period and the imperialist era when the *Chosen Tsushinshi* was active. But Korean residents in Japan and Mindan are not involved in the reproduction process of *Chosen Tsushinshi* parade. There is no mention of the colonies in any municipality that wishes to use the *Chosen Tsushinshi*, and a procession is being made solely for the purpose of local promotion. This means that the memories of discrimination and alienation of Korean residents in Japan experienced during the Imperial era are being forgotten. And today, it

* 韓国外語大学日本語学部 : College of Japanese, Hankuk University of Foreign Studies, 107, Imun-ro, Dongdaemun-gu, Seoul, 02450, Korea / yaena@nifty.com

shows that they are not subjective in the event of *Chosen Tsushinshi* Parades that links Korea and Japan. The Korea-Japan exchange by the *Chosen Tsushinshi* procession points out the problem of today's international exchange which is being used for the local promotion, rather than developing the original ideology of the overcoming of the history problem and understanding of others.

キーワード：朝鮮通信使 在日コリアン 国際交流 対馬 下関

Keywords: Chosen Tsushinshi, Korean residents in Japan, International Exchange Project, Tsushima, Shimonoseki

はじめに

日韓各地の朝鮮通信使にゆかりのある地域において、朝鮮通信使を見直し新たに顕彰しようとする事業が活発化している。地域の祭りに朝鮮通信使を登場させるなどして、国際交流を標榜してそれを観光開発や地域振興に生かそうとする動きである。朝鮮通信使に関する記録物が、2016年3月に日韓の民間団体によって「世界の記憶」に共同登録申請され、2017年10月に登録が決定したのも、この流れの一環ととらえることができる。

このような動きの背景には朝鮮通信使を日韓友好と平和の象徴として位置づけ、望ましい日韓関係構築のためにそれを現代に反映させようとする考え方がある。しかし、これに対して須田は、朝鮮通信使が行き来した近世から日本民衆の中に朝鮮に対する蔑視観があったことを指摘し、朝鮮通信使を通じて日韓に良好な関係が構築されたという認識の広がりには危惧を抱く。「江戸時代の『善隣外交』を強調することは、大日本帝国の時代を異質なものとして日本の歴史から切り離し、大日本帝国の暴力的植民地支配をイレギュラーな様態として蓋をしてしまうことになってしまう。さらに近代の日本民衆が朝鮮蔑視観を持ち、国家による朝鮮侵略を積極的に支持し、朝鮮人に暴力をふるった、という事実から目をそらすことにもなりかねない」と指摘している〔須田 2011: 104〕。

現在の日韓の関係において平和や友好がことさら強調されなければならないのは、帝国日本による植民地の時代があったからである。三尾は、一見「親日」に見える台湾とパラオを例に、帝国日本に包摂されながら生きるしかなかった旧植民地の人々が味わう「脱植民地化」の苦悩に、日本人は想像力が持てないのではないかと問う。旧宗主国であった日本人はその声に耳を傾け「脱帝国化」するべきであると論じる〔三尾 2016: 24〕。このような意味でも、一見帝国日本とはなんら関わりのないように行われている日韓友好や平和の象徴としての朝鮮通信使行列事業が問われなければならないと考える。

そこで本稿では、朝鮮通信使行列事業における帝国の時代の移動の結果として作り出され

た在日コリアン¹⁾とその組織のひとつである民団(在日本大韓民国民団,以下民団)²⁾を取り上げる。彼らが朝鮮通信使行列の登場する祭りの成立過程と実行にどのように関わっているかを検討し、帝国の時代、植民地の記憶が抜け落ちたり忘却されている国際交流事業の問題点を明らかにする。

具体的には、朝鮮通信使再現行列を地域の祭りの中で行っている自治体の中から、対馬と下関の事例を取り上げる。対馬と下関はいずれも朝鮮時代に朝鮮通信使が上陸し滞在した場所であり、帝国日本の時代には人と物の行き来が盛んなところであった。対馬は朝鮮半島との圧倒的な近さから往来が盛んであったが、戦後国境によって断絶された。後に述べるように現在では韓国人による観光によって経済的恩恵を受けている。下関は戦前は関釜連絡船、戦後は関釜・釜関フェリーが就航しており朝鮮半島と強いつながりを持ち続けている。在日コリアンに関しては対馬では圧倒的に減少したが、下関では多く在住しているという違いがある。

対馬と下関は、朝鮮通信使の活躍した江戸時代、そして帝国の時代を経て戦後も韓国と強いつながりを持ち続けた代表的地域でありながら、朝鮮通信使行列の成立はそれぞれ異なり、観光振興に対する姿勢も異なる。同時に、在日コリアンの姿も異なる。対馬の事例では単純に参加者が排除されているが、下関では一見包摂されているように見えて、そうではない姿が見えてくる。共通しているのは、朝鮮通信使を活用しようとするいずれの自治体でも、植民地に関してまったく言及されることなく、主として地域振興の文脈で理解されている点である。

朝鮮通信使行列の再現事業をはじめとした国際交流では、基本的に自治体や自治体からの支援を受けている民間団体が主体となっている。またその地域と交流する韓国の姉妹都市や近隣の韓国総領事館などが参与するようになってきている。だが、それに対して在日コリアンや民団との関わりは希薄である。このことから、朝鮮通信使行列を通じて、日本社会が彼らにいかなる役割を期待しているか、あるいは期待していないかを知ることができる。すなわち、在日コリアンが帝国の時代に経験した差別や疎外といった記憶は問い直されることなく忘却され、現在の朝鮮通信使という日韓をつなぐものを再現する行事においても、やはり外部に置かれているということである。言い換えると、朝鮮通信使行列による日韓交流は、本来の理念であるべき歴史問題の克服や他者理解よりも、地域振興に利用されている状況にあると

-
- 1) 日本に在住するルーツを朝鮮半島にもつ人々の呼称についてはいくつか存在する。本稿では、戦前からの移住者とその子孫たちであるいわゆるオールドカマーを対象にして論じ、国籍に関わりなく「在日コリアン」の名称を用いることとする。
 - 2) 本稿では、在日本朝鮮人総聯合会(総連)に関しては対象としなかった。本稿で触れる対馬では早い時期に支部がなくなっており、下関でも拉致問題などが背景となり市民参加のイベントに組織名を掲げて参加するケースがほとんど見られないからである。

いうことである。本稿は、こうした今日の国際交流の問題点を2つの地域の朝鮮通信使行列に参与する在日コリアンを通じてみようとするものである。

I 朝鮮通信使の意義と行列再現

朝鮮通信使は主に江戸時代に日本へ派遣された使節団である。朝鮮通信使が活用されるうえでの共通理解は、対馬藩の外交役をつとめた雨森芳洲の言葉である「誠信交隣」をキーワードにして、朝鮮通信使を現在の日韓関係の友好のモデルとするものである。

朝鮮通信使が残した多くの史料を世界の記憶にしようと、2016年に日韓の民間団体が共同で申請を行った。その申請案件名は、「朝鮮通信使に関する記憶——17世紀～19世紀の日韓間の平和構築と文化交流の歴史」である。概要は次の通りである。

朝鮮通信使は、16世紀末に日本の豊臣秀吉が朝鮮国に侵略を行ったために途絶した国交を回復し、両国の平和的な関係を構築し維持させることに大きく貢献した。

朝鮮通信使に関する記録は、(中略)朝鮮通信使が往来する両国の人々の憎しみや誤解を解き、相互理解を深め、外交のみならず学術、芸術、産業、文化などのさまざまな分野において活発な交流がなされた成果である。

この記録には悲惨な戦争を経験した両国が平和な時代を構築し、これを維持していくための方法と知恵が凝縮されており、「誠信交隣」を共通の交流理念として、対等な立場で相手を尊重する異民族間の交流を具現したものである。(中略)

ゆえに、この記録は両国の歴史的経験に裏付けられた平和的・知的遺産であり、恒久的な平和共存関係と異文化尊重を志向する人類共通の課題を解決するものとして極めて高い価値を有している。

[[『朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産日韓共同申請書調印式』資料より]

申請を行ったのは、日本側の朝鮮通信使縁地連絡協議会(略称、縁地連)と、韓国の釜山文化財団³⁾である。後述するように縁地連は対馬の呼びかけで成立したネットワークで、韓国側で朝鮮通信使事業を主管するのが釜山文化財団である。

朝鮮通信使の現代的活用の先駆けは対馬といえよう。対馬は朝鮮半島との地理的近接性を生かした韓国人の観光誘致に取り組む特徴ある地域であり、1980年から夏祭りの中で朝鮮通

3) この団体は当初「朝鮮通信使行列再現委員会」として発足し、後に釜山市の外郭団体である釜山文化財団に吸収された。対馬の通信使行列に影響を受けて2003年から行列再現を行っている。現在は毎年5月初旬に「朝鮮通信使祭り」を主管し多彩なパレードを行っている。

信使の再現行列が行われている。この対馬の朝鮮通信使行列は各地に影響を与えた。対馬の行列を招聘したり、これを見本にして朝鮮通信使行列を新たにその地域の祭りに導入する自治体が増えた。2002年から2005年の間に順に下蒲刈、釜山、下関、川越で通信使行列が実施され始めた。2015年からは京都の祭りで朝鮮通信使行列が登場するようになっている。

朝鮮通信使ゆかりの地は多く、通信使が残した資料は各地に散在しているが、そのままでは観光資源にはなりにくい。それゆえ可視化した再現行列⁴⁾というかたちのパフォーマンスが受容されたといえよう。パレードの形で表現される行列が地域の特性を代弁する役割をもち、その地域の祭りの重要なアイテムとみなされるようになった。

世界の記憶への登録に向けた活動の仕方や、朝鮮通信使行列再現という共通したアイテムの利用にあたっては、自治体によって異なる認識や成立過程があることが容易に想像でき、平行して実動する行列を行う人々やそれを見る住民たちにも異なった認識があるのも事実である。次章からは、対馬と下関の朝鮮通信使行列の成立を検討しながら、日韓関係や歴史認識と最もかかわりのある在日コリアンの参与について考察していく。

II 対馬の朝鮮通信使行列と在日コリアン

1 対馬の朝鮮通信使行列

最初に、対馬と朝鮮通信使行列について整理しておく。対馬は、最寄り空港がある福岡からよりも韓国からのほうが約50キロとはるかに近く、古代より中世、近代を通じて朝鮮半島と強いつながりをもってきた島である。古代は防人の島として知られ、中世から近世にかけては、朝鮮半島との交易と外交を一手に担ってきた。近代には、大陸に向けた要塞としての役割を期待された島であった。そして現在は、「国境の島」として、韓国からの観光客が急増していることで良く知られるようになっている。

対馬の観光は、何より朝鮮半島との歴史性と近接性に裏打ちされた戦前戦後の多様な人的、物的交流が基盤になっているといつてよい。中でも朝鮮通信使をモチーフにした地域振興および観光振興が重要視されている。対馬は、朝鮮通信使の日本最初の上陸地であり、江戸城まで対馬藩の武士が随行していったという歴史がある。また朝鮮通信使行列再現や全国ネットワークの形成に熱心な複数のキーパーソンが存在した。彼らの活躍により朝鮮通信使行列が開始され、縁地連が誕生している。

朝鮮通信使の再現行列は、毎年8月の第1週の週末に開催される「厳原港まつり（以下、港まつり）」において行われている。かつて「対馬アリラン祭」の名前で良く知られていた祭

4) 当然ながら予算や地域の特色によって異なり、パフォーマンス性が加味されるので、正確な意味で「再現」とは言えない。

りである。できるだけ歴史に忠実な衣装と工夫をこらした道具を用い、招待された韓国からの舞踊団や楽団などを含めておおよそ 400 人の規模で行列が行われている。

朝鮮通信使行列の始まりは、大阪で上映された朝鮮通信使研究家の辛基秀による記録映画『江戸時代の朝鮮通信使』をみた商店主の庄野晃三朗氏が感銘を受けたことに始まるとされる。庄野氏は対馬を盛り上げるために 1980 年から地元の祭りである「港まつり」の出し物として仮装行列を始めた。対馬は 1970 年代から韓国が見える「異国情緒」をキャッチフレーズにして国内からの観光誘致を進めていたときであった。異国情緒ただよう朝鮮通信使行列をメインイベントにすえ、祭りの名称に「アラン祭」が使用されるようになる。1995 年には朝鮮通信使にゆかりのある地域を結ぶネットワークである縁地連が結成された。こうして朝鮮通信使行列は日韓交流の象徴的イベントとして定着していき、「日韓交流の島」が対馬の新たなスローガンとなっていく [村上 2014a]。

この過程で観光戦略も韓国からの観光客誘致にシフトしていった。2000 年には船による釜山からの定期国際航路が就航している。2011 年、東日本地震の余波で航路が一時的に途絶えたが同年中に路線は複数路線化、高速化した。このことにより、現在は最短で 1 時間 10 分ほどで釜山と結ぶようになり、観光客が急増している⁵⁾。2015 年には約 21 万人が対馬を訪れている。対馬にとっては経済的波及効果が大変大きく、2012 年の韓国人による観光消費は 5 年前より 11 億円増加し 33 億円であったという [『西日本新聞』 2014 年 1 月 8 日付]。

さて、「港まつり」は行列と韓国の舞踊団の公演を除けば、むしろ住民が歌や踊りなどの出し物を披露し、芸能人の歌を楽しみ、花火を鑑賞する地元の祭りである。日韓交流のシンボルでありながらも、地元根付いた祭りであるという二面性をもつ。こうした形態になったのには観光振興が深く関係している。つまり、行列は当初余興的な意味合いで始まり、あくまでも地元の祭りを盛り上げるためであったのが、日韓交流の意味が後年に新たに付与され、観光振興の素材となったという経緯があるからである。

組織も 2 重の体制である。現在祭り全体を率いるのは「港まつり振興会」で、対馬市商工会厳原支部が中核となっている。それに対して朝鮮通信使行列は、創始者である庄野氏の遺志を直接的・間接的に継いだ有志によって構成される「朝鮮通信使行列振興会」が運営する。ただし、市が後援し、関係の来賓を招いた歓迎晩餐会は市主催で開かれているという意味で、

5) 対馬の観光資源としては、厳原町に残る城下町の町並みや、韓国との関連史跡のほか、海や山の風光明媚な景観を楽しむのが一般的となっている。対馬は近さと安さゆえ短期間の旅行者が多く、キャンプ、サイクリング、登山愛好会などの団体旅行にもよく利用されている [中村 2015]。こうした、観光商品は旅行社の主導の下に、安価に抑えられていることが多い。対馬において韓国人を観光客として誘致するにあたってさまざま葛藤があった。業者が信用できない、観光客のマナーが悪いなどといわれている。生活の場に表れる観光客に対して生活を保護しようとする対馬の抵抗と分析できるが、韓国への蔑視観があるのも否めない。

朝鮮通信使を通じた国際交流は自治体が主導している形態である。

2012年には、祭りにとって大きな転機となる出来事があった。いわゆる「仏像盗難事件」である。「仏像盗難事件」とは韓国人によって2体の仏像が盗まれた事件だが、韓国の地方裁判所が返還禁止命令を下し、今でも1体が返還されていない。この出来事に対する抗議として、2013年の通信使行列の中止と、今後の「アリラン祭」の名称の使用中止が決定された。この年の祭りの名称は「巖原港まつり」と変更されている。こうした決定には「地元の人からの寄付が集まらない」という理由が挙げられ、「祭りは韓国のためにやっているのではない。対馬のものである」という祭関係者の声が開かれた。一方で、島内外から友好の象徴である行列がなくなることへの危惧、また観光に与える影響を危惧する声があがっていた⁶⁾。結果的に、翌年の2014年は朝鮮通信使行列は再開が決まったものの雨により中止となり、実質的に翌2015年から再開された形となった。この出来事を通じて明らかになったのは、朝鮮通信使による日韓交流を全面に出したい自治体に対して、韓国色をなくしたい祭りの実行者たちとの葛藤があったことである。

他にも、行列振興会のメンバーでも「祭りから『アリラン』がなくなったら何の祭りか分からない」との声もあった。また、長年続いてきた行列がないことにさみしさを感じ、復活を願う一般の人々の声もあり、多様な見解があった。いずれにしても、朝鮮通信使を軸にした「日韓交流の島」のコンセプトは対馬の地域振興⁷⁾にとって重要であることが確認された出来事であった。

2 対馬の在日コリアン

それでは対馬において在日コリアンはどのように朝鮮通信使行列にかかわっていたのだろうか。まず在日コリアンが対馬でどのような存在であったか整理しておく。対馬に住んでいる、あるいは住んでいた朝鮮半島にルーツをもつ人々の歴史は長いが、資料は多く残されていない。だが、戦前戦後の韓国とのつながりは、記憶として広い範囲で共有されている。年配の人々の中には、戦前に釜山へ映画館、美容院、病院などに行ったことを記憶している人もいる。そして、そういった思い出話を両親や祖父母から聞いたという人々も少なくない。対馬から野菜や魚が出荷され釜山の市場で売られていたと具体的に記憶している人もいる〔上水流 2014: 141〕。釜山に住んでいた人も多かったとみられ、ある程度の年齢層では、どの家のだれが釜山生まれであるという知識も持ち合わせている。

6) しかし前年からの航路の増設の影響で、かえって観光客は増加している。

7) 対馬市は近年朝鮮通信使に関連した顕彰事業にも力を注いでいる。豊臣秀吉の朝鮮侵略の後の通信使再開に尽力した初代藩主宗義智、対馬藩の外交役を務めた雨森芳洲など、朝鮮通信使をめぐる新たな顕彰の動きが続いている。

戦後、原則として自由な行き来が不可能になってからも、朝鮮半島との直接的な行き来をしていたことは対馬の人々に記憶されている。村上 [2014b] によれば、戦後、「変則貿易」という形で日韓の経済交流があったという。当時の法律では日本側からは正式な輸出入として、韓国の立場からは密輸入として貿易が行われており、韓国の船員が大量に品物を買っている様子を覚えている人も少なくないという。この貿易の形態は 1965 年の日韓国交正常化をもって終焉している。

戦後の在日コリアンのイメージはどうだろうか。豚肉に味付けをした「とんちゃん」という郷土料理が、現在も肉屋を経営しているある在日コリアンの店から始まったものとされていることを除いては、現在対馬の人が語る歴史の中に在日コリアンが登場することは多くない。対馬の人々の戦後の在日コリアンに関する記憶に一貫しているのは、彼らが炭焼きをしていて貧しかったことである。60 歳代後半のある男性に韓国のイメージを尋ねると、「今は違うといっても、韓国人のイメージは炭焼きをしていたし、貧しい、みすぼらしいというイメージ」と語っているが、少なくない人々の記憶として残っている。

朝鮮半島にルーツを持つ人々のなかには、直接半島から来た人もいたが、九州などから移住してきた人々も多かった。対馬南部在住の在日コリアンの A さん（女性 60 歳代）は、父親が九州で働いていたところ、対馬で儲かると聞き結婚後移住してきたという。本人は対馬で生まれ、対馬では家族で山に住み炭焼きをしていたという。

戦前から炭焼きは多かったようで、宮本の著書には「日韓合併の後は朝鮮への日本人の進出がいちじるしく、釜山に向けての薪炭の移入がようやく多くなり、島の北部はその金によってうおうた。と同時に業者たちは朝鮮人を炭焼きに雇うて焼かしめた。こうした人びとの群が 1000 人近くもこの島に入り込んでいたことがあった」[宮本 1969: 240-241] とある。また「島の人々はなにほどもこういう仕事に従おうとはしない」[宮本 1969: 241] としている。当事者も炭焼きの記憶を語っている。『辺界の異俗』には、昭和 10 年に伯父を頼って 19 歳で慶尚北道から対馬へ移り住み炭焼きをしていた人物が、炭焼きをしていた人々の多さを語るシーンが収録されている。

「炭焼きの仕事は、ここへきて覚えたんです。対馬に来た韓国人の人は、みんな木炭生産する人ばかりです。」[高澤 1989: 237]

「対馬では多い時には、韓国人の人と日本人の数が大方半々に近いのではないかと思うほどおったですよ。何千人おったか。」[高澤 1989: 238]

この人物によると、日本人の親方に多く差し引かれ、借金がなかなか返せない状態であっ

たという。この他、『在日一世の記憶』にも、対馬で炭焼きをしていた人たちのことが語られている。

「向こうは「サネサラム」(山の人) いうか、炭焼きの人がほとんどじゃったんです、トンボ(同胞) はね。炭ジャンサ(商売) やってた人もいましたよ」[小熊・姜編 2008: 324]

また漁師や海女として一定期間対馬に出稼ぎに来る人々も多く、定着する人もいた⁸⁾。濟州島出身(1916年生まれ)の女性が次のように語っているように、楽な仕事ではなかったようである。

「お父さん(夫)は学校の仕事してた。朝鮮学校建てるため寄付をみつめたりして、家にお金を持ってけえへん。どうしてもあかんから、海女に行くことにしたんですねん。毎年3月から10月まで対馬に行ったよ。一つのグループは4,5人やけど、みんな合わせたら4,50人どころやない。親方さんは対馬の日本の人で、海を区切って買うんですねん。親方が借りてくれた家で、みんな一緒にご飯食べるし、一緒に寝るし。…(中略)メリヤスの服の上にゴムの服を着て、海中メガネをして、朝8時に海に入ったら11時まで潜るね。昼なったらあがって、また1時に潜って、5時に出てきた。取るのはアワビとサザエや。(中略)お金もらうのは四分六。10万円儲けたら4万円。」

[小熊・姜編 2008: 38-39]

対馬で60歳代～70歳代の人々に聞くと、学校のクラスには必ず数人は在日の人が出たが、年を負うごとに減っていたという。在日の家族を対馬の外に逃がす手助けをしたという人に出会った。その家族は炭を運ぶトラックの会社で、まるで奴隷のように働かされており、見るにみかねて船を手配して大阪へ夜逃げさせてやったという。およそ50～60年ほど前のことである。この人の夫人が子供の時も、ある日突然同級生がいなくなったことがあり、夜逃げしたのを後で知ったという。

対馬での就職先は限られており、生活のため、就職のために外に出ていく人が年々増加した。Aさん自身は、自営業を営み、住むところもいくつか変えながら働いてきた。対馬で高校に進学する人はほんの僅かで、ほとんどが島外で就職するために出て行ったという。「私たちみたいに韓国の人はこちら(対馬)に親戚がない。外に出た子どもが親を呼び寄せる」といい、

8) 濟州島出身の海女については李 [2001]、伊地知 [2000] に詳しい。

ますます対馬から在日コリアンが減ったと話してくれた。Aさんの記憶では、自分が中学生の頃1000人いた在日コリアンの9割が外へ出て行ったという。

終戦のとき朝鮮半島の出身者は対馬に7000人いたともいわれ、1949年に3000人、その10年後に2000人になったという〔嶋村 2013: 63, 71〕。さらに時代を下ると減少は顕著である。新聞記事をもとに書かれた『戦後対馬三〇年史』によれば、1952年に2473人だった「韓国・朝鮮人」が、製炭業の不振により京阪神方面へ流出し、1967年に750人になったと記録されている〔斉藤 1983: 203〕。

在日コリアンの減少は、対馬の人口減少の構造とわずかの時間差を置いて相似している。働き口を求めて島外へ出る若い人は多く、対馬の人口もまた減少している。かつて、対馬の人口は明治末期で5万人いたとされ、最も多かった1960年の約7万人をピークに減少し始め、2016年7月現在で約32000人となっている（対馬市の統計による）。

対馬には朝鮮総連の設立が先行し、1950年に民団が結成されている。当時250人が参加して厳原で民団設立大会を開いた〔嶋村 2013: 59〕。通常、民団の地域本部は都道府県にひとつだが、当時、対馬には多くの朝鮮人が住んでおり、また島であったため、設立ができたようである。

しかし、在日コリアンの人口減少にともない朝鮮総連も早い段階でなくなり、厳原にあった民団対馬本部は支部であった比田勝に本部を移し、事務員ひとりの連絡事務所となった。近年団員は10戸に満たないほどに減少し、この事務所も2016年8月に閉鎖されてしまった。当事者によると、現在の在日コリアンは20名程度で韓国籍を持つ者はその半数、あるいはそれ以下だろうという〔上水流 2014: 149〕。

3 在日コリアンの朝鮮通信使行列への参与と民団の衰退

では、在日コリアンや民団は朝鮮通信使行列や祭りにどのように関わっていたのだろうか。多くの資料は残されておらず、さらに調査が必要だが、民団は行列が登場した当初からある程度の関わりがあったようである。

「港まつり」が開かれる前日の夜には、市役所の主催で、姉妹都市である釜山市影島区など、主な関係者を招待した晩餐会が行われている。朝鮮通信使で交流する自治体、韓国からの招待客、日韓議員連盟の議員、日韓交流団体など各種団体の代表などが参加している。

比田勝にあった民団対馬事務所のBさん（女性60歳代）によると、「昔は団長が行列の輿⁹⁾にも乗っていた。晩餐会にも出席していた。韓国からのお客さんも多かった」ということだった。しかし、その後、市役所は民団を相手にしてくれなくなったのだと言う。だが、市

9) 韓国側の関係機関の役職の高い人物や、ゆかりの人物および著名人が選定され、朝鮮側の正使と副使役に扮装し、輿に乗って行列に参加する。日本側では、同様の人物が対馬藩主と雨森芳洲役を務める。

役所を定年退職した関係者によると、民団にはかつてホームステイ事業にも参加してもらっており、「厳原町¹⁰⁾は民団を大事にしていた。団長に挨拶にも行った」と言う。祭りに関しては、「舞踊団派遣の口利きはしてもらったかもしれない」そうだが、それも「平成に入ったころまで」だと言う。

朝鮮通信使行列振興会の第一世代は、熱心に釜山やソウルに赴いて衣装の買い付けや交渉を行っていたそうである。しかし、例えば衣装や道具をそろえるのに苦労した思い出話の中には、便宜を図ってもらった韓国領事館などの話題が出ることはあっても、民団や在日コリアンの話題はほとんど登場しない。前述の関係者によれば、「平成になってから、民団自体が勢力を落とした。2桁になって、核になる人がいなくなった」のだという。1980年に朝鮮通信使行列が登場し、「日韓交流」のシンボルとして成長していく中で、反対に対馬の民団は力を失っていったと見ることができるだろう。

民団が力を失う過程には多くの在日コリアンが島外に流出していったことに加え、帰化者の増加も関係している。前述のAさんは、下の子どもが学校に上がるときに一緒に帰化したという。祭りに関しては、「見には行くけど。(交流は)民団の人たちがするでしょう。私たちは微妙な立場。帰化してしまって、日本人だし」と語った。一般に帰化した人々は民団とのつながりも絶ってしまうことが多いためである。一方で、実際には現在では民団は祭りに主体的に関与することはなく、市役所が様々な面で中心となっており、在日コリアンを含め一般の人々にも「市役所がしている祭り」、「一部の人が熱心にする祭り」のような理解をする人がいる。

朝鮮半島との関係が深く、多くの在日コリアンが住んでいた対馬で行われる日韓交流イベントには、韓国から来る来賓のみならず、当然在日コリアンが関与して当然に思えるが実際には彼らは祭りからは疎外された形になっている。朝鮮通信使行列は日韓交流のシンボルであっても、韓国からの来賓や関係自治体との代表的な人々による国際交流としての側面が大きいという実態である。

III 下関の朝鮮通信使行列と在日コリアン

1 馬関まつりにおける朝鮮通信使行列

本章では、下関の「馬関まつり」における、朝鮮通信使行列の事例を検討してみよう。下関は、大量の貨物と旅客が輸送可能な関釜・釜関フェリーによって韓国とつながりを持ち、在日コリアンが数多く住む地域である。また下関は、壇ノ浦の戦い、巖流島の戦い、幕末・明治維新、

10) 対馬市に合併する以前の町名。対馬南部に位置する最大の町である。

下関条約など、歴史の観光資源が豊富である。下関には各種の祭りが存在するが、夏から秋にかけて行われる三つの大きな祭りの時期が観光のピークであるという。5月のゴールデンウィークの先帝祭、盆前後の花火大会、そして8月後半に行われる朝鮮通信使行列が出る馬関まつりである。

馬関まつりは、1974年に始まった祭りが前身で、市民が参加する歌と踊りがコンセプトであった。1978年から馬関まつりという名称を使用している。毎年8月の下旬に開催され、市内の数ヶ所で多数のイベントが行われるが、メインイベントは4000人が参加するという平家踊りと朝鮮通信使行列であるが、近年はよさこい大会やディズニーパレードが人気を呼んでいる。

朝鮮通信使行列は、朝鮮通信使が上陸した地点近くの海沿いの公園をスタート地点にして、関門海峡と関門橋をバックに華やかに行列する。スタート地点付近は写真を撮るには絶好のロケーションであるが残暑の厳しい時期に行われるため見物客はさほど多くない。

行列の運営における対馬との違いは、下関は行列の事務局を市役所におき、市の職員が行列担当者になる点である。何よりも大きな違いは、行列を姉妹都市である釜山市から来た釜山文化財団が主催して行う点である。釜山からすべての衣装や道具を持ち込み、着付けから行列の編成や、実際の行列の進行など、ほぼすべてのことを行う。行列の中での日本の部分である長州藩主と武士役の衣装だけは、毎年対馬の行列振興会から借りている。なお、着物の着付けは、地元の着付け教室のボランティアが行うことになっている。

行列は、韓国側から参加した釜山市民、舞踊団、楽団など合わせて100人程度と、一般に募集された下関の市民100人程度、合計200人程度で構成される。他にボランティアスタッフも参加しており、これらの一般の募集は市で行っている。下関側の参加者は年によっては萩市から参加する人もあり、毎年その顔ぶれは変化する。

馬関まつりにおける朝鮮通信使行列は2004年から始まっている。市役所の職員によれば、2002年の日韓ワールドカップの頃の友好的雰囲気醸成が直接的な契機となったという。毎年5月に行われている釜山の「朝鮮通信使祭り」のようなものを下関でもやりたいということで、当時の市長が友好都市の釜山に協力を申し入れ、現在の形になっている。行列を担当する市民課の資料によると、朝鮮通信使行列再現事業の内容は「まつりに華を添えるとともに、「善隣外交・誠心交隣」の精神のもと、下関市と釜山市両市の市民レベルでの文化交流を一層深めようとするもの」と記されている。

ただし、釜山文化財団の担当者にとって、下関の行列は「我々のイベント」である。釜山から大勢の参加者とスタッフを送り込み、大量の道具と衣装を持ち込んで全面的に彼らが作り上げる行列だからである。下関市民の中にも「釜山のイベント」と理解している人も少なくない。自分たちとは関係ないと考えているのである。

なお、行列の定例化以前には、2002年日韓国民交流年を記念した朝鮮通信使の全国縦断リレーイベントである「JAPAN-KOREA 市民交流フェスティバル 2002 in 下関」が行われた際に、下関と釜山の市民が参加して朝鮮通信使行列が行われていたことがあった。この行列が下関市内を歩く形で行われた最初の朝鮮通信使行列とみられる。

これ以前も、朝鮮通信使に注目する動きはあった。下関市は朝鮮通信使縁地連絡協議会に早くから参加し、1996年に第2回協議会大会を開催している。だが、当時でも「朝鮮」に対するアレルギーと、朝鮮通信使が朝貢使であったという間違った認識があり、担当者は大変な苦勞をしたそうである。この時は、対馬の朝鮮通信使行列振興会のメンバーが「衣装の再現」の意味で会場を一周している（『山口新聞』1996年11月24日付）。

現在では夏の風物詩として、馬関まつりの中の朝鮮通信使行列は定着したとみてよい。年々知名度を上げ、山口県の地元新聞である『山口新聞』では2009年から、馬関まつりの始まりを告げるイベントとして朝鮮通信使行列の写真を大きく一面に掲載するようになっていく。

2016年は下関市と釜山市の姉妹都市締結40周年を迎える年であった。朝鮮通信使行列に釜山市長が参加したほか、いくつかの記念イベントが行われた。しかしながら、釜山市と下関市は都市規模において対等なものとはいえない。下関市の観光交流担当職員によると、釜山市と姉妹提携している福岡市に比べると圧倒的に都市規模が小さいため、下関のほうが「釜山に思いを寄せている」のだという。そのため、関釜・釜関フェリーをはじめとした、釜山とのつながりの強さを生かしたいという。

2 民団と朝鮮通信使行列

人口の減少に伴って在日コリアンの参加が希薄になった対馬とは異なり、下関では馬関祭りに民団がある程度関わっている。まず、民団山口県下関支部の婦人会が毎年馬関まつりの出店スペースに出店し、チヂミやビールを販売している。また、下関市主催の朝鮮通信使行列再現事業歓迎夕食会には山口県地方本部団長、下関支部団長、各支所婦人会長をはじめとした幹部が多数出席するのが恒例になっている。

下関支部のCさん（男性70歳代）によれば、行列の創生期には釜山側からの要請もあって様々な支援をしたという。釜山から来るスタッフや参加者に弁当やお茶を差し入れし、市内観光に連れて行ったりもしていたが、予算の関係上長く続けられなかったという。そこで行列に参加する方向に転換し、数年前から毎年人数の増減はあるものの、数人～30人ほど参加している。動員していた時期もあったというが、基本的に自由意志で、市の参加募集要項が出る時にある程度的人数で参加している。近年は団長が熱心なこともあって事前に30人の枠を確保してもらおう形で、民団が団員や協力関係にある日韓親善協会などから参加してもらおうと呼び掛けている。ただし、在日コリアンであっても個別に一般募集に応募する人

に関しては民団では完全に把握してはいない。

行列の参加募集は市で行い、行列は釜山文化財団が行う。そのため、参加者を出す以上には民団が行列に主体的に関わるわけではない。ただ、もともと行政との関係は強固で、各種のイベントに関係しており、2016年に行われた姉妹都市締結40周年事業に民団も協力したという。

時代を遡ると、他の形で「馬関まつり」に参加していたそうである。民団の幹部を務めていた男性Dさんは、およそ4,50年前には、青年会のメンバーで韓国の結婚式の衣装で着飾ってジープに乗りサムルノリを従えて、当時祭りで行われていたパレードに参加した経験を持つ。これは数年続いていた。通信使行列にも参加したことがあり、現在の朝鮮通信使行列については、「日韓関係がぎくしゃくしていても、民間が（交流を）やればいい。一地域住民として参加して盛り上げて来た。市の活性化と相互理解に役立てればいい。本国との懸け橋になるのが民団の役割ですから」という考えだった。幹部のEさんは、「朝鮮通信使のイベントに民団が参加するのは当然。日韓交流は下関市民が中心になって、我々はそれをサポートしたい」と話してくれた。

しかし、世代によって多少とも考え方が異なるようである。数年前に行列に参加したことのある3世にあたるFさん（男性40歳代）は、もともと民団の活動には熱心ではなかった。これまでは役があっても活動をしていなかったが、親しい先輩が団長になったので、幹部として活動をしている。幹部の彼にとって行列参加は「義務・役割」だという。近年は特に市民の一般参加が人気があるので、「うちですする必要はないのでは」という考えであった。差別の厳しかった少し前までの世代と、実生活で差別を実感することが少なくなった若い世代とでは、民団活動や韓国、そして民族的アイデンティティに対する態度も大きく異なる。朝鮮通信使行列に対する態度も様々であって当然といえよう。

世代による変化として、民団の団員の減少と高齢化が悩みである。Cさんによると、山口県の約6500人の団員のうち、2500～3000人ほどが下関在住であるとのことである。かつて約17000人いた団員は高齢化し、帰化する者も増えたうえ、仕事を求めて大阪、東京方面に移住して行った。幹部の役職に就く人々の高齢化が進んでおり、次世代の育成が課題であると言う。

3 船でつながる韓国との過去と現在

現在下関は、関釜・釜関フェリーによって釜山とつながっている。このフェリーが就航したのは1970年のことで、戦前には同じ航路で関釜連絡船が存在していた。

1905年、釜山―京城―新義洲が鉄道でつながり、同じ年に釜山―下関をむすぶ連絡船が就航することで、東京から大陸への道が開けた。当時、釜山―下関を11時間半、東京―京城

間を60時間で結んだという [金 1988: 12]。初代の船名は対馬丸と壱岐丸、後には、高麗丸、新羅丸と名づけられ、次に景福丸、徳寿丸などの王宮名がつけられ、さらに後代には金剛丸、天山丸、崑崙丸など、あたかも東アジアへの侵略の拡大を表すかのような命名がされている。

関釜連絡船は、1920年代から34年にかけては年間40万から80万人を運んでおり、1936年からは終戦直前まで100万人を輸送している [下関市 1983: 450]。下関からは朝鮮や大陸を目指して移住しようとする日本人を乗せ、釜山からは自発的にも強制的にも日本で働こうとする朝鮮人たちを載せて運んだ。

1923年からは済州島と大阪を結ぶ航路が就航している。大阪に到着した朝鮮人が工業地帯であった大阪周辺にとどまることが多かったのに対して、下関の場合は全国へ散らばっていった [朴 2005: 271] が、近くの炭鉱に送られる人々も多かった。彼らは筑豊炭田を中心とした、九州や山口の炭鉱の労働に従事し、厳しい労働・生活環境におかれていた¹¹⁾。下関は徴用された朝鮮人労働者が振り分けられる場所でもあったという [下関市 1983: 700]。関釜連絡船で渡ってくる朝鮮人の増加に対応するため、下関には一時保護（収容）施設である昭和館という施設があり、宿泊提供、就職あっせんなどを行ったとされている [前田 1992: 47]。

敗戦になると、朝鮮半島へ帰ろうとする人々で下関はあふれた。多くの人を乗せるには船便が足りなかったことや、帰国しても生活のめどが立たないなど、さまざまな事情で、そのまま下関にとどまる人々も多かった。いったんは帰国しても生活できずに密航の形で日本に戻る人もいたとされる。例えば、下関在住の在日コリアンのGさん（男性50歳代）の父親は、15歳で日本に渡り、日本軍となんらかの関わりのある仕事していたらしいという。父親は具体的なことは話さなかったが、「親日」と批判されることを恐れて韓国に帰らず、日本に定着する道を選んだのではないかとのことだった。いずれにしても、植民地時代に様々な事情で日本に渡り、そして下関にとどまった人々の相当数が、日本の植民地支配の象徴たる関釜連絡船と何らかの関わりがあると言っても過言ではない。

下関駅周辺に形成されている「グリーンモール」という商店街は、戦後の闇市から出発している。現在は、「釜山門」のモニュメントが、そこがコリアンタウンであることを表現している。戦後、焼け野原になっていたところに朝鮮人が独占的に「早い者勝ち」で店を出したという [島村 2003: 12]。現在では、在日系の商店や焼き肉などの飲食店が多い。近年、シャッターが下りた店が目立つものの、毎年11月23日に「リトル釜山フェスティバル」を行って街おこしをしている。戦後の混乱の中、在日の人々は店を出す以外にも、生活のために違法なものも含めて様々な仕事をするしかなかった [島村 2003]。また条件の悪い場所に集住する傾向があった。在日の人々が集住した地域のひとつに、「在日韓国・朝鮮の人々の間

11) 林 [1989] に詳しい。

では、トンクルトンネ（糞窟村）と呼ばれている」ところがある。「三方が高くなって中央部が極端に低く、そこに汚物が集中したためにこの名がついたと考えられる」という〔豊田 1989: 117〕。かつて刑務所や火葬場があった狭い土地に多くの人が暮らす、劣悪な住居環境であった。

戦後途絶えていた韓国航路が復活したのは、1965年日韓国交正常化後の1970年である。政治家の肝いりで日韓の共同資本（正確には在日資本）による「関釜・釜関フェリー」が就航した。関釜連絡船の時代の暗い歴史を持つ航路に、韓国側では当初は反対の意見もあったが、対日貿易を増やしたい韓国と、経済成長が著しい韓国との経済的つながりを求めた下関の双方の目論見が一致した結果だった〔山本 2011〕。

下関には日韓国交正常化の翌年の1966年に、韓国領事館が開設されていた。1980年には総領事館に昇格し、1996年に広島へ移転するまで韓国にかかわる業務を行っていた。下関韓国総領事館は当時山口、広島、島根を管轄していたが、1991年に広島とソウル結ぶ空路が開設されてから、広島と韓国の結びつきが強くなり、広島に移転し広い地域を管轄することになった。領事館の広島移転のニュースに地元は衝撃を受けた。「もし事実なら国際交流の拠点性を高める大きな柱を失う」、「下関にはこれまで培った日韓交流の実績がある。仮に移転となっても下関に何らかの機能を残してほしい」などと経済界の声があがっていた（『山口新聞』1996年6月26日付）。市長が存続を求めて韓国を訪問するなどして、結果「名誉総領事館」がおかれることになった。実務を行なわないが、韓国とゆかりのある下関の名士が「名誉総領事」を委任されることになった。初代名誉総領事にはフェリーの開設、釜山との姉妹都市提携を行った井川元市長が委任された（『山口新聞』1997年7月2日付）。陳情書には「1970年に日本初の国際フェリーが下関—韓国釜山間に就航し、頻繁な人、物の交流が始まり」、姉妹縁組など活発に行っている件が記されていた（『山口新聞』1996年7月12日付）。

総領事館の移転に下関が衝撃を受けたのは、国際交流が揺らぐこと以上に韓国との経済交流に影響があることを危惧したからである。ポッター¹²⁾と呼ばれる個人による小口の商売から、各種の日韓貿易まで、韓国とつながりをもって商売をする人々の存在は重要と考えられていたといえる。

このように下関において、現在韓国とのつながりが語られるとき、基本的に歴史的な側面よりも経済的側面に偏る傾向があるようである。さらに、国際交流について帝国の時代の過去が顧みられ公に論じられる場面は多くない。朝鮮通信使に詳しい下関市の関係者は、かつて在日コリアンに対する差別が厳しかったと振り返りながら、「韓国のことを悪く言う人もい

12) ポッター（ふるしき）チャンサ（商売）の略でフェリーを利用したいいわゆる「担ぎ屋」のことである。在日コリアンの代表的生業のひとつであったが、実際には韓国から来る人が多く〔島村 2002〕現在には衰退傾向にある。

るが、経済的なつながりは強い。下関は昔から商業都市で、気持ちのつながりというより利益のつながりが強いのだという。朝鮮通信使による国際交流は、「(在日コリアンという)「足元の国際性」を見つめなおすことから始めなければならない」と語ってくれた。

下関も対馬と同様に、国際交流に帝国日本の歴史的背景が意識化されているわけではない。現在において朝鮮通信使行列は、過去を意識化しないフェリー就航後の国際交流、特に下関―釜山間の自治体交流の象徴として扱われており、同時に経済的・文化的地域振興の手段として認識されているといえよう。

IV 地域振興としての朝鮮通信使行列と在日の役割

ここまで対馬と下関の朝鮮通信使行列を中心とした国際交流への在日コリアンの関わりを考察した。まず、朝鮮通信使の成立過程とその定着過程では両地域で差異があった。

対馬では、地元の祭りを盛り上げるために仮装行列として始まった朝鮮通信使行列が、後に国際交流の意味付けをされて成長していった。この出自であるからこそ祭りの実行者と行列の実行者は、地元貢献の自負を持っている。それが仏像盗難事件の折に「祭りは韓国のためにやっているのではない」という訴えとなって表れたと考えられる。一方で、朝鮮通信使を対馬のブランドとし観光資源としたい対馬市は、朝鮮通信使行列を日韓交流の象徴と認識している点で、多少のずれがある。国内からの観光客が伸び悩んでいる対馬にとって、今や韓国からの観光誘致は島の産業になくはならないものになっている。国境に近い離島として、朝鮮半島との関係史や朝鮮通信使を対馬の独自性として打ち出す、ある意味で切実なものである。

この点、下関の場合、朝鮮通信使は数ある観光資源のひとつに過ぎない。間もなく明治維新150年を迎える山口県は、幕末からの歴史を観光資源の重要なポイントにしており、主に国内からの観光客を狙っている。朝鮮半島との関連の歴史は長い、朝鮮通信使行列は、釜山市との友好を表すものとして始まった出自から、現在でも釜山からの全面的な支援の下で、市民交流を標榜して行っている。釜山からきたスタッフが行列を完全に取り仕切る様子はそれを体現しているようであった。

では、在日コリアンの参与はどうであっただろうか。対馬においては、現在では参与と呼べるものが存在していなかった。対馬では植民地時代に朝鮮半島から移住し炭焼きを営んでいた人々が、戦後製炭業の衰退により就職口を求めて国内外へ移動した結果、人口減少したことが直接的原因であった。しかし、もともと対馬で始まった朝鮮通信使行列はその成立から、在日コリアンが直接的に関わることがなかった。民団組織が機能していた過去にはある程度関与できたものの、当初から外部化されていた形である。

対馬と比較して下関の場合は、多くの在日コリアンがおり団体や個人での参与が見られた。下関では朝鮮半島から来た人々が定住・流動する中継的な場所であり、戦前戦後を通じた移動を通じて在日コリアンの社会が形成されていき、戦後は関釜・釜関フェリーによって日韓のつながりが継続されてきた場所であった。そのためか在日コリアンは国際交流にある程度の参与ができていた。

ただし、対馬との差異は、戦後早い時期からの直接航路の存在によりある程度の経済的影響力を持っていたことと、減少したとはいえ一定程度の人口を保ってきたことによるものに過ぎない。朝鮮通信使行列に焦点を当ててみたとき、対馬同様成立から直接に関与することはなかった上、実行はすべて釜山市から派遣されたスタッフによっている点で在日コリアンは完全に外部化されている。対馬と比較して在日コリアンが朝鮮通信使行列に関わっているように見えるが、排除されている構造は同様である。

対馬と下関のいずれの地域でも国際交流の主体は実質的に自治体であることは共通していた。現在の日韓の交流は、植民地時代の朝鮮との人の往来の結果生まれた在日コリアンとはほぼ無関係に行われていた。つまり、朝鮮通信使を素材にした国際交流は、ユネスコの記憶遺産申請に見えるように、朝鮮通信使が友好使節団であったことだけを強調し、韓国への理解を深めるものになっていないことも同様である。まして帝国日本の時代の人の移動の歴史とは断絶している。祭りというイベントでは、行列のパフォーマンスは顕示的なものであって、自治体の日韓交流のシンボルの意味合いが強い。世論の移り変わりによっては対馬のように韓国色があることを嫌う雰囲気さえ作られうる。

前出の対馬のAさんは、「戦争に対して、なんで私たちがここにいるかということに関して無知よね。日本の人は無学。無学だからちょっとしたこと（差別的なこと）が言える」と断じる。また、民団のBさんは、祭りに参加しなくなったことや、民団の縮小の理由のひとつに対馬の人による差別があるという認識だった。旧宗主国であった日本側の歴史認識や韓国の人に対する差別も、国際交流事業がいかに向き合うか問題となる。

自治体が行う朝鮮通信使行列は、「善隣外交」という理念を掲げるだけで、地域振興、地域おこしの顕示的な意義しか持ちえてないのではないだろうか。広島県で朝鮮通信使行列事業に関わる人物は、呉市下蒲刈（朝鮮通信使の宿泊地）で行われている朝鮮通信使行列に関連して、「地方自治体の朝鮮通信使行列に共通しているのは町おこしと言う点で、日韓親善とはいっても観光効果だけがねらいなのが実体。本当に朝鮮通信使を広めるためには、何か新しいイベントが必要」と語っていたのは的を射ている。

おわりに

現在、朝鮮通信使行列の行事が自治体中心に地域おこしの文脈にとどまり、平和と国際交流を標榜していても在日コリアンに大きな役割を期待していないことが分かった。このことは冒頭の須田と三尾の指摘のように、旧植民地の被植民者へのまなざしをよく表していると言えるのではないだろうか。

ただし、本文の中でも見てきたように、在日コリアンの中でも様々な見解と多様な行事への参与の仕方があった。世代深度が増し、ルーツに対する思いも多様化している。例えば、下関で商店を営むHさん（男性50歳代）は、一世の父が朝鮮総連の活動家であったというが、40歳のときに思うところあって父親の出身地が現在の韓国であるため、韓国籍に書き換えた¹³⁾。「子どもたちには隠さずに堂々と生きていってほしい。絶対に帰化はさせない」という。その一方で、前出のGさんは、「厳しい親の手前、自分は帰化できなかったが、子どもは日本籍にした。墓も要らないし、韓国のことは形も残さないでいい。自分の世代で終わりにしたい」と語ってくれた。いわば、在日コリアン自身が「帝国」時代の記憶を忘却しつつあるともいえる。

しかし、日本の中にある朝鮮への蔑視観が結果的に現在の在日コリアンの人々に対するまなざしを生み出し、戦後も差別して来たことに目を背けることができるだろうか。自治体、ひいては日本社会は、地域振興の名の下で忘却している帝国の記憶と在日コリアンの存在についてもう一度思いを巡らす必要があるのではないか。今後、朝鮮通信使行列を通じた国際交流には、朝鮮通信使に友好や平和の意味だけを見出して地域振興の道具としている現状にいかにか意識的になれるか、そして地域振興以上の意味をいかにか付与できるかという課題がある。旧植民地の被植民者の人々への日本社会のまなざしを「脱帝国化」した国際交流が望まれる。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、JSPS 科研費、JP21320165、JP25244044、JP17K03305の研究助成を受けた。記して感謝申し上げます。

13) 日本において北朝鮮との国交がないため「北朝鮮籍」は存在せず、「朝鮮籍」と称されるのは原則として記号に過ぎない。

参 考 文 献

伊地知紀子

2000 『生活世界の創造と実践——韓国・済州島の生活誌から』東京：御茶の水書房。

李善愛

2001 『海を越える済州島の海女——海の資源をめぐる女のたたかい』東京：明石書店。

小熊英二・姜尚中（編）

2008 『在日一世の記憶』東京：集英社新書。

上水流久彦

2014 「海峡を往来した人々」『対馬の交隣』永留史彦・上水流久彦・小島武博（編），140-151 ページ，対馬：交隣舎出版企画。

金賛汀

1988 『関釜連絡船——海峡を渡った朝鮮人』東京：朝日選書。

斉藤隼人

1983 『対馬戦後三〇年史』対馬：対馬新聞社。

嶋村初吉

2013 『日韓をつないだ在日魂——民族運動家，権赫斗』福岡：梓書院。

島村恭則

2002 「在日朝鮮半島系住民の生業と環境——ポッタリチャンサ(担ぎ屋)の事例をめぐって」『民具マンスリー』35: 8009-8025。

2003 「境界都市の民俗学——下関の朝鮮半島系住民たち」『越境 現代民俗誌の地平1』篠原徹（編），9-36 ページ，東京：朝倉書店。

下関市史編修委員会

1983 『下関市史 市制施行～終戦』下関：下関市。

須田努

2011 「近世人の朝鮮・朝鮮人観」『日本と朝鮮比較・交流史入門』原尻英樹・六反田豊・外村大（編），103-128 ページ，東京：明石書店。

高澤秀次

1989 『境界の異俗——対馬近代史詩』東京：現代書館。

朝鮮通信使縁地連絡協議会・釜山文化財団

2016 『朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産日韓共同申請書調印式』。

豊田滋

1989 「下関における韓半島の文化（その4）」『地域文化研究所紀要』1: 114-129。

中村八重

2015 「観光交流からみた日韓関係——対馬の韓国人観光を中心に」『日韓関係史 1965-2015
Ⅲ社会・文化』磯崎典世・李鐘久（編），353-369 ページ，東京：東京大学出版会。

林えいだい

1989 『消された朝鮮人連行の記録——関釜連絡船と火床の坑夫たち』東京：明石書店。

朴一

2005 「在日コリアンの経済事情」『歴史のなかの「在日」』藤原書店編集部（編），267-286 ページ，東京：藤原書店。

前田博司

1992 「『昭和館』の歴史」『山口県地方史研究』6: 44-54.

宮本常一

1969 『日本の離島 第1集』東京：未来社。

三尾裕子

2016 「台湾と旧南洋群島におけるポストコロニアルな歴史人類学の可能性——重層する外来政権のもとでの脱植民地化と歴史認識」『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』三尾裕子・遠藤央・植野弘子（編），1-30 ページ，東京：慶應義塾大学出版。

村上和弘

2014a 「朝鮮通信使行列と〈日韓〉交流」『対馬の交隣』永留史彦・上水流久彦・小島武博（編），17-30 ページ，対馬：交隣舎出版企画。

2014b 「対馬・厳原の変則貿易」『対馬の交隣』永留史彦・上水流久彦・小島武博（編），152-156 ページ，対馬：交隣舎出版企画。

山本興治

2011 「関釜・釜関フェリー就航の経緯とその後の日韓経済交流拡大」『下関市立大学論集』55-2: 61-82.

[参考資料]

『西日本新聞』2014年1月8日。

『山口新聞』1996年6月26日，7月12日，11月24日，1997年7月2日。

中村：国際交流事業における在日コリアンの参与